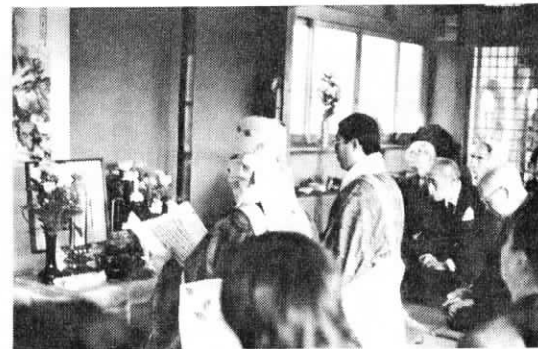


●一浪万波



☆『不老者の集い』、近藤真柄・望月百合子・和田栄吉・柳沢善衛・栗原一夫・平岡誠・武良二・塩長五郎・上田光慶・横倉辰次・三浦精一・佐野甚造・山本敏雄その他おもに大震災前から活躍された青年処女達が、旧臘一日、小石川後楽園で歓談の一刻を過ごした。

何れも半世紀近い歴史を偲び感慨深かった。当日参加できなかった古河・布留川・古川・安谷・水沼・緒方・中村・小島・中沢・若杉諸氏のご健勝を切に祈る。……☆『巖窟洞と原爆』、平岩巖氏が晩年心をこめて造られた十数坪の見事な茶室巖窟洞を、カノ未亡人が世田谷被爆者の会に寄贈された。この席で会津手打ソバと山菜料理と銘酒に舌鼓うちながら語りあつた同志は多い。☆その家が埼玉の丸木美術館（原爆絵画館）に休憩所と

して移設され、旧臘二五日、移築記念・故人の一周忌・被爆者三三回忌の法要がそこで営まれた。写真には荒畑寒村氏と添田知道氏の顔が見える。

故人と夫人の誠意に改めて深く敬意を表する。……

☆一月一日、杉藤二郎君の所に行つた。山梨から小島康彦君、そして二日には大島英三郎君が来た。杉藤君は思つたより元気になつていた。こうして余命いくばくもない僕たちが顔を合わせることが、ただそれだけで嬉しい。

Gina Ariosa, Baltimore

(三浦)



BREAK DE CHAINS OF
LEGALIZED U\$ SLAVERY

the prisoner struggle
the womens' struggle
the struggle for a new society

中国無政府主義試論

(10)

劉 師 復

志 麻 達 夫

無政府党の組織に関して師復は次のように解説している。(論社会党「民声」第九号)

「……無政府党が管理、代表等の権能に対し極端に反対するのは、絶対自由を主張するからである。無政府党は当世の政党組織機関がみずから党の綱領を定め、人入党をすゝめるようなことはしない。各国の無政府党は大低自由に集合する場所をもっている。しかし全体的な固定した機関があるのではない。その性質はクラブに過ぎず、その作用(機能)は思想の伝播と集会・談論である。集会もまた全く自由で、手続きなど一切不要だ。無政府主義を主張する人が無政府党なのであつて、志願書(申込書)を書かねばならないとか、党員証を保持して初めて党員になるというようなものではない。無政府の行事は、みなそれぞれ独立し、自由なのである。指揮を受けるとか、全体の決議をまつのではない。たゞ集結した多くの人が、同時に何事かをやろうとすれば、同意した力を合わせてやろうとするのだ。ところが当世の一般の党(政党)では、党中の少数者が議決した事を党員は遵法して行わ

なければならぬ。今の社会党(師復が指摘しているのは江亢虎氏の中国社会党の事―訳註)は政党形式を採用して、章程(規則)があり党の綱領があり、入党制限(即ち党人の紹介、約定を守るとの誓い)がある。入党志願書と党員証と党旗と分会の幹事がある。これ等はすべて無政府の宗旨に抵触するのだ。記者(師復の事―訳註)の個人的見解では、わが党で集会を持つなら、それは研究社(会)やクラブを設置すればよい。そこでは、無政府の事業をやりたい人は誰でも会友となることができ、それで主義の伝播や集会、研究、連絡、交友で固まれるのがよい。もしわが党の共通意見を宣布したければ、別に無政府党大会を開き、われわれの進行方針や当面の事業を大衆討論で発表し、宣言書を公布して、われわれの主張はこうである。われわれの進む方針はこれこれだ。共同目標はこうなんだと知らせるのだ。それがわが党の宗旨に背反しない仕方である。(但し今日の中国内の同志は少く、無政府党大会を開く時期には未だ至っていない。われわれは万国無政府党大会(本年の開会はロンドン―一九一四年)にあつて種々の報告を取り寄せ中国文に訳し配布するだけだ。)

無政府党は党の綱領を定める必要があるか
世間の政党は皆、二三の党員が党の綱領をきめ、この

綱領によつて衆を集める。だから党首が主動で黨員は受動だ。しかも多数黨員の声（の力）を利用して、党首の名譽を製造する。それでもつて彼は出世階段を登るのだ。無政府党では、各個人が独立している。人は自由に意見を發表する権利がある。どうして少数人の意見で制定した党の綱領で多数人の同意を強要することができようか。故に私が判断して言えるのは、無政府党には所謂、党の綱領はない、故に一定の主張がないのだ……とするのではなく、無政府主義の根本要義が即ち無政府党の一定の主張である。これによつて、無政府党はすべて同意するし、これを越えるものはない。ただ一般社会をみると、未だよく判っていないのだから、無政府党は随時意見を大衆に向け發表すべきである。それは個人で意見を發表するなり、書きもの、報告、演説等でよい。共通の意見の發表は、大会での討論の結果で、それは無政府党大会の名義で發表するなり宣言するのである。両方とも自由言論で所謂、党の綱領や党の目標の名称はとらない。……入党者は党規、綱領に従つて、服従、崇信せよというのなど無政府党の極端に排斥するものだ。なぜなら各政党が服従するのは党の首領に対してのものと差異はないからである。……

（この後江氏の社会主義と無政府主義との差を繰返し

述べている。理由は筆者のみる限り、江氏が余りにも無政府主義のテーマに執着し、一見では師復の主張と酷似するからであろう。しかし無政府主義者の師復としては近親憎悪の気持からではなく、真理探究の主義者としての心意気と解した方がいいようだ。文献によれば石川三四郎は一九一三年三月六日・九日、江氏の中国社会党本部を訪ねている（石川三四郎選集第七巻「黒色戦線社刊一九七七年PP77・80」）そこで八支那旧来の労働組合、村落の共産組織、即郷党、並びに宗族組織のことを質問して見た。Vとある。この時点は八月の八民声V発行前の時点であり、江氏に対する師復の論評は一四、一五年に亘っているから、少くとも一時期には中国社会党が隆盛であつたのが判る。しかし江氏は政治活動で挫折の上、一九三〇年代には日本軍に協力して汪兆銘政府の考試院長になつた。その限りでは彼師復の江氏の社会主義に対する数々の指摘は当を得ていたと評価できる。）

更に師復は一九一四年の時期に明確に無政府主義の組織論を把握していたのが興味深い。クロボトキンの八麵包の略取Vは幸徳秋水によれば八・一八九年仏国で出版され、一昨年（一九〇七年）……略取は一九〇九年（明治四十二年一月二九日付として……筆者註）英訳が出来た……とあるが、八民声Vでは一九一四年四月一日、第五号

に八麵包略取V序……絃訳として、初めて掲載され、第七、八号で序を分載、第一二号で第一章八論吾人之財富V第一八、一九号で第二章八万民之安樂V第二〇号で第三章八無政府共產主義V第二三号で第三章つづき、また本号は師復の逝世（死去）をにかけている。原本は英訳か仏文なのか判然としない。と言うのは二二号迄は副題に英語を記し、二三号は仏語を記しているからである。そして八民声Vではこの第三章迄の分載で終っている。なお一九一四年民声社で働いた事のある山鹿泰治は後に八平民の鐘Vを訳したが、八民声Vでは一九一四年五月九日第九号に師復がエスぺラント語から訳して分載を始めた。四章迄は彼の訳で五章（第二四号所載）は方統訳とし、第二六号に（第七章完）となっている。

* * *

師復の無政府共產主義はその八無政府浅説V晦鳴録一九一三年八月二〇日号に明白である。（参照中国のアナキズム運動R・A・スカラビーノ G・T・ユー著丸山松幸訳PP172・185）

大意では人類は政府がなくても生活できるのであり、むしろ政府こそ人民の八一挙手一投足Vに繩をかけ自由を失わせる……と言う。八政府とは何か？ 強權の發生源であるV八政客（政治家）は政治の作用として民衆のた

めに外からの侮辱を防御し争いを鎮め、人民を虐げないと言う。しかし私から言わすれば、すべての政府が人民を虐げないなら、いわゆる外国の侮辱を容易に得るのであるうか。（そうではなくて）まず政府が人民の物をかすめ取り、その後、外国の侮辱を防ぐことを口実として自ら言葉を飾っているだけなのである。今もし外国の侮辱を防ぐとして両国が相争うとすれば必ず勝敗があるう。さすれば勝者は外国の侮辱を防ぎ得たので良い政府なのだろうか？ そうではなくて、その勝者こそ人民からかすめ取ることにすぐれた者である。近世の列強とは皆そういうものなのだ……V八：政府は人民の争いを鎮めると言うが、政府の執行する法律は社会に固有な習慣を集録したもの過ぎない。これは近世無政府主義の大家クロボトキンの説である。では習慣を敬い守るがよろしい。さすれば争いはないだろう。それでも争いがあるなら、またその社会に固有な習慣で解決できないなら、争いの根源は別にあるのであつて、その源を清め、その流れを治めようと欲するのはよいとして、私には政治がそれを解決するとは思えないのである……V八人の争いは社会組織の不善（備）による。法律の力がよくするものではない。また都市では法律が厳格だが、争訟や犯罪者が多く農村ではしばしば法令の及ばない所があるが、そこでは

争訟や犯罪者はほとんどないのだ。これは法律が社会にとって無益なことの証明である。V/A人間の生は生活の欲望を満足させるにある。それは衣食住の欲望で、生産物による。生産物は土地から生まれ、人間の力で作りだすものだ。：しかるに社会には私有財産制度がすでにあり、金銭をもつものが最高の生活をしている。しかもその人は生産の力を出す人ではない。そこで人は、金銭が万能と見るのである。これによつて金銭の争いもでてくる。：この争いに勝つた者は、残り高ぶり淫佚(逸)にながされ、同胞を牛馬のように扱う。弱者は溝に転落し、狡猾な者が詐術と偽を習う。能力の劣る人は身を売り(下僕や妾となり)力売る(日雇や車夫となり)売皮肉(肉体を売る娼妓となる)。これらだつて生活である。体力能力が強く激しい人は危険に走り、人からかすめ盗るの生涯(生き甲斐)にする。彼は殺人を子供の遊びぐらいにしか考えないのだ。今日の社会の暗さ、悲惨、危険な事のすべては、私有財産制度によるのであつて、法律はあつても足りないくらいだ。

無政府主義は私産制度を廃絶し共産主義を実行する。各人が能力を尽し、需に應じて取るなら、貧富の階級は均等になり、金銭の争いはなくなり、自由争奪の社会は一変して、協調と愛の社会になるだろう。争いがなければ

ばどうして擾乱の悩みがあるうか。或はまた人は言うだろう。人民の程度が同じでない。教育が普及していないからだ。一度無政府となつても、真理を未だ体得する人が少ければ、必ず旧社会の悪習慣が相續いて現われ、秩序のない行為者がでるだろう。この説は急進派に反対する普通の論旨だ。また心では無政府主義者を願望する人も往々にしてかような心理になるようだ。しかし教育の普及を待つて、その後で無政府が実行できるのなら、急進主義者があえて主張するまでもなからう。そういう人は人類の道徳が不良なのは、社会が劣悪なのであつて、社会が劣悪なのは、有政府が原因なのを知らないのだ。もし諸悪の(根源である)政府が一度去れば、人類の道徳はすぐ純美なものに立帰るだろうし、必ずしも久遠で深遠な教育者をまつまでもないのである。何によつてこ言うのか。強盗は強奪する、故に今の世ではいわゆる不道徳の行為だとする。しかし盗みの原因は貧しさにある。人が貧しいのは、富者が財産を専有するからだ。富者が世界公有の財産を専有して、貧者があえて誰何(とやかく言う)しないのは、有政府と法律がこれを保護しているからである。もし無政府で私産制度を同時に廃絶するなら、世界の産物は世界の人の共用に提供され、貧富の階級はなくなり、強盗の劫掠(かすめ盗る)も自然

に跡を絶つだろう。殺人は今の世の中でいわゆる不道徳な行為だ。然し殺人の原因は十中八九まで財産争いになる。でなければ色欲の争いだ。財産争いは、私産制度により、財産を私有とするからであり、色欲の争いは婚姻制度によつて、婦人を私有とするからである。この二つが存立するのも他でもなく、政府の法律(所謂民法)によるのだ。もし無政府で私産を絶ち、婚姻を廃するなら財産も色欲も均しくて争いはなくなる。殺人もまた社会に皆無となる。ところで自分の利益だけを計り公益をかえりみないのは、今の世で最も普通な不道徳行為である。将来の無政府の世では、私産がなく、家族がなく、社会は個人の(属する)直接の団体であり、個人は社会を構成する単純分子となる。人は各自が社会に尽力し仕事をし、幸福を得るのだ(即ち仕事をして、衣食住、交通等ができる)。人と共に享受するのであつて自分一人のためだとか、他人のためにだけするのではない。ここでは最早、公私の別なく私利は公益に他ならなくなる。

…V (この項つづく)

●海外だより



Blanca Esgleas
Germinal y Federica
Montserrat

フェデリカ・モンテセニの死

少し古いことだが、フェデリカ・モンテセニが昨年九月二三日に死んだ。

赤のドロレス・イバルリとならぶスペイン革命の二大名花の一つ、現在は『エスボアル』誌に毎号社説を執筆していたフェデリカ・モンテセニが亡命先のトゥールーズで逝った。彼女について詳細は語るまでもなからう。同志や友人による葬儀は翌二四日に行われ、ヨーロッパや中南米のONT関係者をはじめORIFAのマルゾッキなどからも弔電が寄せられている。彼女の最後の社説は同誌十月二日の「カタルニア九月一日」である。

女性だから年令は省略するとして、名前について記しておく、フランカ・エスグレラス・モンテセニが本名で、ふつうファーストネームあるいはミドルネームとして使用されていたフェデリカはペンネームであつて、ヘルミナール・エスグレラスという筆名もあり、これかなり使用されている。

本誌前号で報ぜられているONT交流会が開催されていたときにはすでにこの世の人ではなかつたのである。心より冥福を祈る。

(JUNKO)

アナキズムと獄中者組織

若山 健二

(一) 獄中者組織(以下獄組と略す)といつても獄中者の組織だけをさすのではなく、監獄、刑務所、留置場、少年院、強制収容所、「精神」病院などの諸施設に拘禁されている者の組織、獄中者の救済支援、上記の諸施設の全廃、改善などのために活動することを主要または一つの目的とする組織であり、日本にもあることは周知の通りである。ノーベル賞を授賞したことでその活動がヨリ広く知られるようになったAI(アムネスティ・インタナショナル)も同じような活動をしているが、AIがその対象を政治犯、思想犯に限定しているのに反し、獄組は全獄中者を対象とする。ここに決定的な相違がある。歴史的にみると獄組はAIよりもずっと古く、地道な活動をつづけている。

監獄制度の撤廃、全獄中者の解放等につき最も力強く発言していたのは思想的にみるとアナキズムの潮流で、

「社会主義」諸国、第三諸国にはないようである。最も多いのはアメリカで、カーターの人権外交、家政婦としていわゆる一般刑事犯の雇用はこうした背景があるから可能なのではないだろうか。

現在までに判明した獄組をいくつか略称で記すと、まずAOLU(アメリカ)、PROPE(イギリス)、CAP(フランス)がそれであり、特にAOLUは「獄中者が自分でする訴訟の手引き」「獄中者の権利ハンドブック」を獄中者に無料(獄外者は有料)で提供している。女性の獄組も多数あるようで、名称を見ただけで活動内容がわかるWFWP(ウーメン・フリー・ウーメン・イン・プリズン、アメリカ)をはじめ、名称ははつきりしないがNCWP(アメリカ)、WP(カナダ)その他がある。次にアナキズム関係の獄組も各国にある。ONTとの関係でOPEL(スペイン)、IWWとの関係では一九一七年に設立されたGDO(北米)、ウォブリーのOWP(アメリカ)、アナキズム文献を獄中者に無料で差し入れているBBB(アメリカ)、アナルコ・フェミニストも参加している女性獄組のTLG(アメリカ)、そしてHAPOTOC(オランダ)がある。

(三) HAPOTOC(ヘルプ・ア・プリズナー・アンド・アウトロー・トーテュア・オーガナイズイング・コ

トルストイ、クロボトキン、ゴールドマンはもとより、「一人に対する弾圧は万人に対する弾圧である」を標榜するIWWもまたそうであり、現代においては運動と思想の次元で往時よりもいっそう鋭利になっているようである。「ようである」というのは、判断するのに必要な資料がほとんど入手できず、氷山の一角から多くのことを推測せねばならないからである。かつてのようにオール・オア・ナッシングの発想、つまり国家、法律、監獄の廃止を呪文のように唱えていればいずれば廃止されると信ずるかの如き平板な発想は影をひそめ、ずっと緻密な理論的な作業も行われており、獄組とは直接的には関係ないが、今年の夏、「法とアナキズムに関する国際ゼミナール」開催の呼びかけも伝えられており、理論的には空白に等しかったこの方面でも相当の水準に達しているようである。もう少し容易にさまざまな資料が手に入ればもつと多くの情報も伝えることが可能なのだが、むしろ商業ルートでの購買は不可能であり連絡先が不明なものも多く、手をこまねいているのが実状である。

(二) 秘密あるいは地下の組織ではないにもかかわらず、海外の獄組について今のところ実体はなかなかわからず、せいぜい組織があるということがわかっている程度である。存在するのは先進資本主義諸国のいくつかであって、

ミッティ)は今日までに私が接触することに成功した唯一の獄組である。創設者はMICHAEL・TOBINであり、AIのかつての一員であるという。創設されたのは一九七四年九月、宣言が発表されたのは翌年の夏で、WILHELM・REIOHの影響ある国境を越える組織である。機関紙HAPOTOC・NEWSLETTERの最近号には、欧米はもちろんアジア、オーストラリアの獄中者のいくらかのリストがあり、クリスマス・カードと新年の賀状を送るようにと読者に呼びかけている。シンボル・マークはSUN、「太陽系においてすべての動物、植物、鉱物に共通する」太陽である。創設以来わずか三年ながら急速に充実してきており、最近組織の再編、機関紙誌の変更があつたが、これも組織の拡充のためであろうと推定される。詳細についてはいずれ紹介することにして、別稿でこの獄組を知る基礎的な資料を訳出しておく。尚、表紙はシンボル・マークの模写である。



野火

(江藤・編)

研究誌の紹介

八号(一九七七年十二月十五日)、無政府主義研究

玄曜社、七五〇円。△特集V日本千年王国論。「編集後記」にこうある。「日本千年王国論

——大方の識者には、おそらく怪訝な顔をされそうな特集タイトルであろう。しかしこの国の共同性の光と闇の襞の奥に、ありうべき存在態へのかすかな予感にみちびかれつつ非在の淵に架けたしたたかな夢想が、たしかに存在すると見て取ったのだ。そして、日本という国に於ては、形を変へても、本質的なものがいかに

しつように存続しつづけるかを、改めて思い知った。原像に対するメタフィジックと嗅覚とを磨かねばならない。」

△千年王国Vとは「ありうべき存在態」につけた名称、△ユートピアV△桃源郷Vともいう。△千年王国Vの由来については、かいてないので、わからない。古代人の抱いていたユートピア、いく人かの思想家の描いたユートピアなどについての、かなりの力作がならんでいる。全部よみとおすのはかなりしんどいが、じっくりよめば、それぞれおもしろい。ただ不満なのは、日本人のユート

ピア像をとりあげ、一五〇頁におよぶ研究誌を発行した△編集者たちVの主張がないことである。読者におもしろい読み物を提供して、利潤をあげることを目的とするなら別だが、出版活動は思想の表現行為のひとつである。せつかくの創造物に、読者への訴え、あるいは主張を盛り込まないのは、もったいないというより、無責任ではないかとさえ思う。特集として、書き手も内容もちがう七編をまとめたのだから、「日本千年王国論」としての共通点、問題点などを整理してほしかった。

菅田正昭の「常世論、妣の国と常世——原初のユートピア」は、著者が青ヶ島(東京都)に住んでいたときに生まれた子に、「常世」と名づけたことから、日本各地にある青島(オウノシマ)と、古代人のいっていたユートピアである常世との関係を探るとともに、常世とはどういうものか、おもしろ折口信夫の研究(「妣が国へ・常世へ」)「古代研究(民族学篇I)」を引いて解説している。過ぎ来た方をふり返る魂のふる郷が「妣が国」であるのに対して、「常世」は、前方にあくがれる、気候がよく、物資の豊かな、住みよい異郷であるが、古代人にはこの二つはしばしば同一のものであった。常世とは、「いつでも米ができる」クニ(我々の祖たちは常世国から米をもたらし)であり、著者によればいけばん

けているのだ。」

柏木隆法の「幻の『修道苑』と大逆事件——内山愚童における仏教的千年王国の志向——」は、内山愚童(一八七四—一九一一)の思想的な成長を、時代の背景、家庭の問題、進歩的な仏教徒や社会主義者との交流をたどりながら記述しており、興味をもつて読んだ。著者は、生存者の証言なども集めて、怪僧愚童和尚の業績を掘り起している。この論文は、未発表の原稿「^{ゆえ}樹の伝説」からの抜萃であるという。

日本千年王国論特集の他の論文は、「安藤昌益の農本的国家論——ユートピア思想を通して見たその萌芽性」(新谷正道)、「大杉栄のユートピア思想」(米沢幸三)、「サンカ考——上垣和三郎・落魄の知」(那岐一堯)、「肉体の千年王国」(松田修)、「アナキズムと天皇性」(白井新平)である。

アナキズム

16号(一九七七年九月三〇日)、同編集委員会、五〇〇円。△特集V甦れ、ブルードン。「ブルードンの現代的意義」(奥沢邦成)、「ブルードン——所有・経済民主制・相互主義的連合主義」(ジャン・パンカル)、「資料・ケインズとブルードン」(ダッドレイ・ディラード)が収められている。

大事な点は、性別を超えてひとつの靈魂に帰してしまつた単数としての祖靈たちとまれびと神の住んでいるところが常世である、ということである。「したがって、時を定めて寄り来す異郷の客人(マレビト)は、訪れられた人びとにとっては、出立をちよつと見ただけでは出身をまったく異にする異郷人におもえても実際は、祖先の靈魂を身につけた、精神的同郷人なのである。」しかし、その後、常世の零落化が進行した。浦島ノ子の伝説では、彼の渡つたところが常世であることが軽うじて判るが、桃太郎の伝説になると、常世の入口としての△オウノシマV(青ヶ島)は零落し、△鬼ヶ島Vに変貌してしまつた。そこで、折口信夫左派というよりも平田篤胤左派を自任する著者は主張する。「われわれは常世を奪還しなければならぬ。というよりも、常世を創出しなければならぬ。」「常世をなおざりにすれば、われわれはかならず常世から報復されるだろう。なぜなら、原始ユートピアとしての常世は、神(祖靈・子孫の靈)・人・自然がひとつの共同体の構成員としての世界であつたからである。ここでは、人びとは、ひとつの火(力)で作つた食事(ケ)を共食し、ひとつのすみか(家・ケ)に集り、文字どおりのハラカラであつた。とにかく、現在、われわれは、常世を忘れることにより、自然の報復を受